

第1問

- I(1) 求める台車の速度は
- $v_1 = a_1 t_1$

移動距離は、 $v-t$ グラフの面積から、 $x_1 = v_1 t_2 = a_1 t_1 t_2$

- (2) 時刻
- $0 \sim t_1 = \frac{T}{2}$
- では、
- $y = -\frac{ma_1}{k}$
- を中心として単振動して、
- $y = -\frac{2ma_1}{k}$
- の位置に達する。

時刻 $t_1 = \frac{T}{2} \sim t_2 = nT$ では、 $y = 0$ を中心として単振動して、 $y = \frac{2ma_1}{k}$ の位置に達する。時刻 $t_2 = nT \sim t_1 + t_2 = \frac{T}{2} + nT$ では、 $y = \frac{ma_1}{k}$ を中心として単振動して、 $y = 0$ の位置に達する。したがって、求める物体の y 座標は $y = 0$ ，そのときの台車に対する相対速度は 0

- (3) 振動の中心が時刻
- $0 \sim \frac{T}{2}$
- では
- $y = -\frac{ma_2}{k}$
- ，時刻
- $\frac{T}{2} \sim T$
- では
- $y = \frac{ma_2}{k}$
- となり、

それぞれ単振動の端からもう片方の端へ運動するから、時刻 T に位置 $y = 0$ に来るためには、時刻 $\frac{T}{2}$ での位置は、 $y = \frac{2ma_2}{k}$ で、時刻 0 での位置は、 $y = -\frac{4ma_2}{k}$ とならなければならない。したがって、 $y_0 = -\frac{4ma_2}{k} \therefore a_2 = -\frac{ky_0}{4m}$ 時刻 $\frac{T}{2}$ での位置は、 $y = -\frac{y_0}{2}$

- II(1) 質点に働く力の棒に垂直な成分は、

$$f = mg \sin \theta - ma \cos \theta \doteq mg \theta - ma$$

- (2) 角度の振幅が
- $\frac{\theta_0 - \theta_1}{2}$
- であり、振動の中心が
- $\theta_c = \frac{\theta_0 + \theta_1}{2}$
- だから、

時刻 t における振り子の傾きを表す角度は、 $\theta = \frac{\theta_0 - \theta_1}{2} \cos \sqrt{\frac{g}{l}} t + \frac{\theta_0 + \theta_1}{2}$ ア ②, イ ①この単振動の角振動数を $\omega = \sqrt{\frac{g}{l}}$ ，質点の変位を $z = l\theta$ と置くと、質点の軌道接線方向の加速度が $\alpha = -\omega^2(z - l\theta_c) = -g\left(\theta - \frac{\theta_0 + \theta_1}{2}\right)$ と書き表されるので、求める復元力は、 $F = m\alpha = -mg \left(\theta - \frac{\theta_0 + \theta_1}{2}\right)$ ウ ⑩

$$F = f \text{ より, } a = g \left(2\theta - \frac{\theta_0 + \theta_1}{2}\right) = g \left\{ \frac{(\theta_0 - \theta_1)}{2} \cos \sqrt{\frac{g}{l}} t + \frac{\theta_0 + \theta_1}{2} \right\} \text{ エ ④, オ ①}$$

振動の半周期において、上式の第1項の単振動と同形部分による速度変化が0になることを考えると、

時刻 $t = 0$ から $\frac{T}{2}$ までの速度変化は、 $v_1 = g \cdot \frac{\theta_0 + \theta_1}{2} \cdot \frac{T}{2} = \frac{\pi(\theta_0 + \theta_1)}{2} \sqrt{gl}$ i同様に、時刻 $t = \frac{T}{2}$ から T までの速度変化は、 $v_2 = g \cdot \frac{\theta_1 + 0}{2} \cdot \frac{T}{2} = \frac{\pi\theta_1}{2} \sqrt{gl}$ ii $v_1 + v_2 = 0$ より、 $\theta_1 = -\frac{1}{2} \theta_0$ iii

第2問

$$I \quad R = \frac{\rho d}{S}, \quad C = \frac{\epsilon S}{d}$$

II (1) コンデンサーには電流は流れず、合成抵抗 NR に電圧 V_0 がかかるので、電流の大きさは $\frac{V_0}{NR}$

$$\text{電極Eの電荷は } \frac{CV_0}{N}$$

(2) コンデンサーに蓄えられていた静電エネルギー $\frac{CV_0^2}{2N}$ が、抵抗 R_0 と、 NR の抵抗から発生するジュール熱に変化する。コンデンサー1個の電圧を V_C とすると、それぞれの発生ジュール熱の比は、

$$\frac{(NV_C)^2}{R_0} : N \frac{V_C^2}{R} = NR : R_0 \text{ となるので、抵抗 } R_0 \text{ で発生するジュール熱は、}$$

$$\frac{CV_0^2}{2N} \times \frac{NR}{NR + R_0} = \frac{RCV_0^2}{2(NR + R_0)}$$

上式より、 N が増加すると、ジュール熱は減少する。→ ②

(3) 1組の電極間にかかる電圧は、 $\frac{V_1}{N} \sin \omega t$ で、抵抗とコンデンサーに流れる電流、 i_R 、 i_C はそれぞれ、

$$i_R = \frac{V_1}{NR} \sin \omega t, \quad i_C = \omega C \frac{V_1}{N} \sin \left(\omega t + \frac{\pi}{2} \right) = \omega C \frac{V_1}{N} \cos \omega t$$

$$\therefore i_R + i_C = \frac{V_1}{N} \left(\frac{\sin \omega t}{R} + \omega C \cos \omega t \right)$$

III

$$\text{ア. } \frac{2V_1}{3} \sin \omega t$$

イ.ウ. 抵抗 R_2 を流れる電流を $i = A \sin \omega t + B \cos \omega t$ とおくと、LM間の電圧は、

$$R_2(A \sin \omega t + B \cos \omega t) + \frac{1}{\omega C_0}(-A \cos \omega t + B \sin \omega t) = \left(R_2 A + \frac{B}{\omega C_0} \right) \sin \omega t + \left(R_2 B - \frac{A}{\omega C_0} \right) \cos \omega t$$

これが、アの式と恒等的に等しいことより、

$$R_2 A + \frac{B}{\omega C_0} = \frac{2V_1}{3}, \quad R_2 B - \frac{A}{\omega C_0} = 0$$

$$C_0 = \frac{1}{\omega R_2} \text{ を代入して、} A, B \text{ を決定する。} \quad \text{イ. } \frac{V_1}{3R_2} \quad \text{ウ. } \frac{V_1}{3R_2}$$

$$\text{エ. } \frac{V_1}{3} \sin \omega t$$

オ.カ. II(3)の電圧を $\frac{V_1}{3N} \sin \omega t$ として同様の計算より、JL間の電流 i' は、

$$i' = \frac{V_1}{3NR} \sin \omega t + \frac{\omega C V_1}{3N} \cos \omega t$$

$$\text{キ.ク. } i \text{ と } i' \text{ の2式を比較して、キ. } \frac{Nd}{\omega S R_2} \quad \text{ク. } \frac{R_2 S}{Nd}$$

第3問

I (1) 入射角, 屈折角が微小のときの屈折の法則より, $\frac{\theta_1}{\theta_2} = \frac{n_2}{n_1}$

(2) $\theta_1 = \alpha_1 + \phi$, $\theta_2 = \alpha_2 + \phi$

(3) $\alpha_1 = \frac{h}{x_1}$, $\alpha_2 = \frac{h}{x_2}$, $\phi = \frac{h}{r}$

(4) (1)(2)より, $n_1(\alpha_1 + \phi) = n_2(\alpha_2 + \phi)$

(3)の結果を代入して, $n_1\left(\frac{1}{r} + \frac{1}{x_1}\right) = n_2\left(\frac{1}{r} + \frac{1}{x_2}\right)$ (式1) ア. $\frac{1}{x_1}$, イ. $\frac{1}{x_2}$

(5) 図3-2(A)の場合 $\theta_1 = \phi - \alpha_1$, $\theta_2 = \phi - \alpha_2$ なので, $n_1(\phi - \alpha_1) = n_2(\phi - \alpha_2)$

$\therefore n_1\left(\frac{1}{r} - \frac{1}{x_1}\right) = n_2\left(\frac{1}{r} - \frac{1}{x_2}\right)$ (式2)

図3-2(B)の場合 $\theta_1 = \alpha_1 - \phi$, $\theta_2 = \alpha_2 - \phi$ なので, 同様にして,

$n_1\left(\frac{1}{x_1} - \frac{1}{r}\right) = n_2\left(\frac{1}{x_2} - \frac{1}{r}\right)$ (式3)

II(1) 求める距離を L とすると, (式1)で $r \rightarrow \infty$ とし, $x_1 = L_1$, $x_2 = L - L_2$ であるから,

$n_1\left(0 + \frac{1}{L_1}\right) = n_2\left(0 + \frac{1}{L - L_2}\right)$ $\therefore L = \frac{n_2}{n_1} L_1 + L_2$

(2) 透明板中の観測者から見たみかけの光源の, 屈折率 n_1 の媒質との境界からの距離を L' とすると,

$L' = \frac{n_f}{n_1} L_1$

透明板と屈折率 n_2 の媒質との境界からのみかけの距離は $L' + d$ となる。屈折率 n_2 の媒質中の観測者から透明板との境界までの距離は $L_2 - d$, 題意より $L = L_1 + L_2$ なので(式1)より,

$n_f\left(0 + \frac{1}{L' + d}\right) = n_2\left(0 + \frac{1}{L_2 - d}\right)$ $L' = \frac{n_f}{n_1} L_1$ を代入して整理すると,

$d = \frac{n_f(n_1 - n_2)}{n_1(n_2 - n_f)} L_1$ $d > 0$ であることから $\underline{n_f > n_2 > n_1}$ または $\underline{n_f < n_2 < n_1}$

(3) 題意より $x_1 = L_1 = 1$ m, $x_2 = L - L_2 = 2$ m,

(式1)に代入すると $1.5 \times \left(\frac{1}{r} + \frac{1}{1}\right) = 1 \times \left(\frac{1}{r} + \frac{1}{2}\right)$ これは $r < 0$ となり不適 図3-5(A)ではない。

(式2)に代入すると $1.5 \times \left(\frac{1}{r} - \frac{1}{1}\right) = 1 \times \left(\frac{1}{r} - \frac{1}{2}\right)$

(式3)に代入すると $1.5 \times \left(\frac{1}{1} - \frac{1}{r}\right) = 1 \times \left(\frac{1}{2} - \frac{1}{r}\right)$

いずれにしても $r = 0.5$ m となるが, $r < L_1 = 1$ m なので(式2)の場合が当てはまり, 図3-5(B)である。

(B) $r = 0.5$ m

(4) 焦点距離を f [m] とおくとレンズの式より,

$\frac{1}{4} + \frac{1}{-3} = \frac{1}{f}$ $\therefore f = -12$ よって 焦点距離 12m の凹レンズ である。